

## 「社会科学と人文学の対話」によせて

著者	岡本 隆司
雑誌名	Humanities Center Booklet
巻	4
ページ	5-10
発行年	2020-07-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00079401">http://doi.org/10.15083/00079401</a>

# 2 「社会科学と人文学の対話」 によせて

岡本 隆司



まずは私自身の立ち位置をご説明することから始めさせていただきます。それがおそらく本日のテーマに一番しっくりくるのではないかと思います。

私は山下さんの『教養としての世界史の学び方』に一章（第4章「アジア史から

見る世界史」）を書いていますので、本日は松方さんの『国書がむすぶ外交』に対してコメントをする役回りだと思うのですが、実は私はそのようにはつきりした立場ではなく、松方さんの研究プロジェクト<sup>2</sup>に関わらせていただいたり、『国書がむすぶ外交』に松方さんが書かれた総論にしばしば私の名前を出していただいていたりにして、本書を外から批判する立場としては私ではいささか不足ではないかと心配しているところです。

松方さんと私は同じ歴史学でも専門はまったく違いますが、歴史学に対して抱いている問題意識やフラストレーションにはかなり似ているところがあるように思います。先ほどの趣旨説明で松方さんがおっしゃっていた「19世紀的言語」や「空間把握」の問題は私も常に感じており、それに対して仕事もしてきたつもりです。ゆえに、『国書がむすぶ外交』に対して批判したい

2 2019年度鹿児島学術振興財団研究助成「長崎口の形成—15～19世紀の長崎から見た日本列島の国民国家形成と対外関係」（研究代表者：松方冬子）。

ことがあるわけではないのです。このセミナーにお招きいただいたものの、一体どうしたものかと思っておりました（笑）。そこで『教養としての世界史の学び方』の山下さんにもお出ましいただいたらどうかと思いつき、松方さんにご紹介したのです。それが、本日、このメンバーが集まるセミナーとなったそもそものところですよ。

ただ、あらためて考えてみると、松方さんと私の不満が一致するということは、私たち二人は、人文学の研究から歴史学を変えるドライブを作りだそうとする立場にいる点で似ていることを意味しているのだと思います。人は、ある「立場」からしかものを見ることができません。その点については、この後にお話しされる山下さんの「史観」、すなわち歴史の見方に関する議論へつながっていくのだろうと勝手に期待しております。

## 19世紀言語に縛られる歴史学

私自身は中国史が専門ということになっていますが、中国史研究者からはほとんど相手にされていません。というのは、中国史とはいっても国内の歴史ではなく「対外関係史」だからです。実は「対外関係史」という用語が正しいかどうか難しい部分があります。一部は「外交史」と言い換えられますし、「経済史」と言い換えられる部分もあるのです。

ともあれ、それが、同じく対外関係史を研究し、おそらく本流の研究者からは白眼視をされておられる（笑）松方さんと話が合う理由だろうと思います。これはおそらく、「日本の」かもしれませんが、あるいは「世界の」かもしれませんが、歴史学という学問のでき方に非常に関わっていますし、後述の「史観」という部分にも関わってくる話になります。

対外関係史は（本来なら歴史学も）、先ほど松方さんのお話にあった「19世紀的言語」から免れることができないという宿命を背負っています。「19世紀言語」は「近代性」という時代的な属性と切っても切り離せない関係にあります。社会科学はそもそも「19世紀言語」がその発展のベースであり、言語として概念を示すだけでなく、議論の仕方をも規定し続けています。そ

して現在、社会科学にとっては「19世紀言語」が研究の前提でありながら、その反面、抵抗すべき相手でもある。そこが、中国史を研究していながら中国史の本流の研究者から相手にしてもらえない私と通じているように思います。ゆえに私は、歴史学者である松方さんの研究に関らせていただき、さらに社会科学の分野で同じ問題に対面されている山下さんの研究にも関わらせていただいているのです。

私の研究は中国・近代が主たるエリアで、歴史学とはいえ現代中国と無縁ではあり得ません。しかし、それとまったく無縁であるかのように研究している日本の中国史研究者は多く、そうして積み重ねられてきた知見やものの考え方から抜け出ることがなかなか難しい。今そういうバックグラウンドを、文明とか文化とか呼んでいるわけで、もっと言語的にしばって漢字・漢語でもよいのですが、そういうもので形づくられる概念・観念・意識、もっといえばバイアスからは、なかなか脱却できません。それは誰もが同じで、西洋には西洋の文明・文化・言語・思考とかいうものがあるわけです。学問は時空を越えて普遍的であるべきですが、それは理想であって、現実にはなかなか難しい。ただそれは、私はどこからどこまで行っても昭和（あえて元号を使います）末期の日本で生まれ育っていますから、そういうバックグラウンドではない方々とどうやって話すか、あるいはそういう対象とどうやって向き合うかということがどうしても問題になってくるわけです。そこは、たとえ同じ中国をやっている、ご出身やディシプリンの点で廣野さんのお立場と方法論とは、かなり切り結ぶ部分があるはずです。こうした話も、先ほどの松方さんがおっしゃっていた、「翻訳にまつわる問題をどう考えるか」にも関わってくるだろうと思います。

特に、日本人が物事を考える上で日本語として活用してきた漢語と、日本語と、それから今我々の頭の中のほとんどを支配している「19世紀的言語」（西洋的言語、近代語）をどう考えるか。中国というアクターの個性と日本というアクターの個性がそれぞれ存在し、その間で何をどう考えたらいいいのかをここ数年考えてきました。今日は松方さんからお声を掛けていただい

て、そうしたことを私が自分だけで悩むのではなく、学問的にもっとオープンな方たちで議論をしてもらえる機会になればと思っている次第です。

## 「史観」を持たない研究者は存在しない！

私は山下さんとはディシプリンも研究のエリア・対象も違いますが、今まで申し上げてきたような関心はかなり似ているところがあるように思います。それで山下さんがご自身の編著への寄稿を私にご依頼くださり、仲間に加えてくださったのだらうと勝手に思っています。

このように言うとおそらく中国史研究の本流にいる方々に怒られますが、私は自分を「考証史家」だと思っています。重箱の隅をつつくのが大好きなんです。ただ実証といっても、ものの見方や考え方、山下さんが次でお話しされる「史観」とは切っても切り離せない。「史観」がないところで、もの考えることはできないはずなんです。「自分には史観などない」と言っておられる方は、それは自己を偽っているか、自分を知らないかのどちらかだと思います。自分にはなんらかの「史観」があることを自覚した上でどう相対化するかを考えていまして、山下さんの『教養としての世界史の学び方』の中では「アジア史」という概念を軸に考察しました。その論考を下敷きにして書いたのが、『世界史序説』(ちくま新書、2018年)です。この内容を実証的な学問研究にする資格・能力は、私にはまったくありません。語学もできなければ、素養もありませんので。ただ、自分の専門の立場から「妄想」はできます。優れた実証研究はたくさんあるので、「アジア史」という概念を東洋史学の蓄積から定義できるであろうと考え、書籍としてまとめました。この本が、「19世紀的言語」や西洋中心史観を相対化する営みの、いわば捨て石の役割を果たせればと考えています。

いわゆる“ネイション”ではなく、“ワールド”でもなく、“グローバル”という言葉ですが、これはヨーロッパではない「アジア」という概念と非常によく似ている西洋人的な考え方だと私は思っているんです。それが底流にある「グローバルヒストリー」を相対化できないかと考えていますが、なかなか

足並みがそろわず、アジアを専門とする歴史家からお叱りを多々受けています。たとえば、ベトナム史の大家の桃木至朗さん<sup>3</sup>からはご自身のブログで厳しい苦言をいただきました<sup>4</sup>。このブログのみならず、ほかにも多方面からお叱りを受けているところです。ただ私は、こうした批判も含めて歴史家の方々の反応を知りたいと思っています。というのも、それが現段階の我々の「史観」や、「19世紀的言語」、「空間把握」などを考えるきっかけになるのではないかと考えるからです。

## 実証史家の方法で翻訳言語を問い直す

次に、先ほど松方さんに出していただいた論点のうちの一つですが、「翻訳」についてもずっと考えてきております。我々は今、歴史学だけでなく社会科学でも使われる概念、たとえば、“市場”や“戦争”、あるいは“外交”といった「19世紀的言語」(西洋語)を使わないと、ものを考えることすらできないという現状があります。それが自明であることを認識せず、自明のまま放置したのでは歴史を問い直すことにはなりません。その自明性を問い直した上でいかにそれを歴史として取り扱うことができるかを考えることが、最近の私の仕事につながっています。たとえば、何年前に多くの方にお声掛けをして『宗主権の世界史』(名古屋大学出版会、2014年)という本を作りました。それが契機となって、自分のフィールドである中国について考察したのが、一昨年に上梓した『中国の誕生 東アジアの近代外交と国家形成』(名古屋大学出版会、2017年)です。

具体的には、我々が学問で普通に使っている言葉、たとえば“宗主権”、それこそ“中国”という言葉もそうですが、そうした言葉・概念をあらためて歴史的に考え直してみよう、いわゆる実証史家の方法を使ってやってみよう

---

3 桃木至朗。大阪大学大学院文学研究科教授。専門はベトナム史である。

4 「アジアから見た世界史とは～「中心中心史観」にからめとられないために (2018年10月6日)」『ダオ・チーランのブログ・パシフィック』。http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-entry-1992.html#comment151 (accessed 20 April 2020). 同ブログによれば、桃木氏は「東南アジアのような『中心性を主張しない地域』を無視し、強いもの・大きいもの・進んだものしか見ようとしないう」歴史の見方を「中心中心史観」と呼ぶ。

したのがこの本です。やはり今日の世界は「19世紀的言語」が牢固として支配しているのが現状ですが、とはいえ、人によっても国によっても異なるように思います。

過日、ありがたいことに、韓国の若手研究者が『宗主権の世界史』の書評を書いてくださいました<sup>5</sup>。今の韓国、特に国史（ナショナルヒストリー）の観点から「宗主権」の概念を問い直すことはなかなか難しいことがとてもよく分かる書評で、私の編著と共にこの書評もぜひ読んでいただきたいと思うようなものでした。これが全世界的な反応である、とか、読者一般の反応だと考えたくはないんですけども、ただこのような反応は厳然として、現実に存在するのだとあらためて認識しました。

また、西洋史研究者にも同じような危惧を抱いている方々がいらっしゃるので、今年の歴史学研究会<sup>6</sup>で“主権”という概念を見直す試みに加わらせていただき、松方さんにも討論に加わっていただきました。“主権”などは今の国家や国際関係や世界を考える上でなくてはならない概念ですが、“主権”とは一体何なのかというところから話を始めようという討論です。そうした試みの一環として私自身も先日、『君主号の世界史』（新潮新書、2019年）という本を書きましたが、これがまた評判が悪く（笑）、こっぴどく批判されています<sup>7</sup>。

今日は、そうした現状を我々がどう考えて研究していくかをあらためて考えることができればと思っております。そして、それが少しでも社会科学と人文の対話につながればありがたい限りです。

---

5 Yoo Bada, "The Suzerainty Concept in the East and West", *Cross-Currents: East Asian History and Culture Review* (e-journal), vol. 32, pp. 165-172. <https://cross-currents.berkeley.edu/e-journal/issue-32/readings-asia> (accessed 21 April 2020).

6 2019年度歴史学研究会大会合同部会「『主権国家』再考 Part2 一翻訳される主権一」において、岡本隆司報告「近代東アジアの「主権」を再検討するー藩属と中国ー」がなされた。概要は、[http://rekiken.jp/annual\\_meetings/2019.html](http://rekiken.jp/annual_meetings/2019.html). 『歴史学研究』2019年増刊号（No.989）も参照のこと。

7 アマゾンのカスタマーレビュー（[https://www.amazon.co.jp/君主号の世界史-新潮新書-岡本-隆司/dp/4106108321/ref=sr\\_1\\_5?qid=1582501363&s=books&sr=1-5](https://www.amazon.co.jp/君主号の世界史-新潮新書-岡本-隆司/dp/4106108321/ref=sr_1_5?qid=1582501363&s=books&sr=1-5)）などを指している。